

研究会・シンポジウム報告

2020年2月21日（金） 定例研究会報告

テーマ： 王兵のドキュメンタリーと反右派運動

報告者： 土屋昌明（所員）

テーマ： フランスにおける王兵

報告者： 山口俊洋氏（本学ネットワーク情報学部兼任講師）

時間： 16:30～19:00

場所： 生田キャンパス 10号館 2階 10204教室

参加者数： 5名

報告内容概略：

この研究会では、王兵監督の作品とそのフランスにおける影響について討論した。王兵監督の最新作『死霊魂』は、中国で1957年におこった反右派運動で、右派とされて甘粛省の夾辺溝農場で強制労働をさせられたあと生還した人々へのインタビューを中心とした、8時間余のドキュメンタリーである。カンヌ招待作品、山形国際ドキュメンタリー祭で最高賞をとり、世界的に知られている。本作で扱われる夾辺溝農場では、二千人を越える収容者が餓死し、中国現代史の闇とされている。王兵監督は、この素材をオーラルヒストリーと巧みなドキュメンタリー術で作品化し、世界に知らしめた。中国の主流思想がこの歴史を隠匿し、問題性を軽視しているのに対し、王兵監督はドキュメンタリー映画によって歴史事実の追究と思想的な問題性を表現した。しかも、取材は中国でおこなったものの、編集技術や資金はフランスから受けるという、政治的な圧力を受けにくい手法をとった。このような王兵作品の意義について土屋所員が見解を述べた。また、王兵監督の創作について、日本ではあまり多くの言及や研究がないが、フランスではすでに专著が2冊出ており、論文や批評文も少なくない。このような王兵への理解と支援がフランスの映画批評界にとって大きな動向となっていることを、山口氏が具体的に調査整理して発表した。

記：専修大学経済学部・土屋昌明